

聖書日課

みちのひかり

2025

8月

今月の聖句

「さあ、私があなたの傷を治し
打ち傷を癒やそう」

エレミヤ書 第30章17節



八王子キリスト教会

8月1日(金) エレミヤ書 第25章

七十年が満ちると…これをとこしえに荒廃させる——主の仰せ。(12)

70 年にわたるバビロンの捕囚と、その後の解放が語られます。今、隆盛を誇るバビロンも、70 年という時の流れの中で滅ぶと告げられます。人の一生に相当する 70 年という長い年月の流れが、真実なものを洗い出します。人間の栄華は過ぎ去り、神の慈しみが残ります。これは、昨日今日の移ろいではなく、ある長い期間を通して現れてくるものです。

神の手からの「憤りのぶどう酒」(15)が国を滅ぼします。そしてそのぶどう酒は「北のすべての王で、近くにいる者にも遠くにいる者にも、すなわち、地上のすべての王国に次々と飲ませ、最後にシェシャク(バビロン)の王が飲む」(26)と言われ、「飲んで酔い、吐け。倒れて起き上がるな。私があなたがたの間に送る剣を前にして」(27)と言われます。

酔いは、正気を失わせます。初めは自分の栄光に酔いしれていても、その酔いが極まり、やがて正気を失い、倒れてしまいます。「絶対的権力は絶対に腐敗する」と言われるとおりです。

「国と力と栄えとはかぎりなく汝のものなればなり」と主がお教えくださった祈りの通りです。

主よ、世界について、そして自分の人生について、何が本当に残るものかを見極めている思慮を、どうか私にお与えください。

8月2日(土) エレミヤ書 第26章

この人に死刑の判決はない。彼は我々の神、主の名によって我々に語ったのだから。(16)

闘いとも言うべき預言者の厳しい預言活動が読み取れます。エレミヤが語るエルサレムの滅亡の預言は、特に「祭司と預言者たち」(8)に受け入れられません。彼らはエルサレムは安泰だと主張していたからです。彼らの主張は「すべての民」(8)に受けがよかったのです。それが民の心の願いと重なっていたからです。逆に縁起でもない滅亡を預言するエレミヤを死刑にしようとします。エレミヤと同じ預言をしていたウリヤも(20 節以下)、王の怒りを買います。ウリヤの場合は、エジプトに逃げ出したものの、連れ戻されてあえなく殺されてしまいます。二つの出来事に共通するのは、神の言葉を黙らせようとする人間の罪深さです。

しかし、エレミヤは処刑されませんでした。専門家たちの意見よりもエレミヤの言葉に神の真理を直感する人々がいたからです。また、かつて預言者ミカの厳しい預言でもヒゼキヤと当時の人々が悔いて受け入れたことを思い起こす「何人か」^{たいてい}(17)も立ち上がります。その道の権威者が大勢に流布するとそれが本当に思えます。しかし神がお語りになる真理の言葉こそが残るのです。主よ、目に見えぬあなたの言葉を虚ろにする不信仰をお赦してください。あなたにこそ救いが必ずあることを信じる信仰をお与えください。

8月3日(日) エレミヤ書 第27章

「バビロンの王の軛を負って彼とその民に仕え、そして生きよ。」(12)

エレミヤは自分の首に軛をはめ、ユダの人々に「あなたがたは首を差し出し、バビロンの王の軛を負って彼とその民に仕え、そして生きよ」(12)「…バビロンの王に仕え、そして生きよ」(17)と、繰り返し預言します。普通、不自由な軛を負うことと命豊かに生きることとは、相反する事柄のように考えます。しかし、軛を負って、なおかつ生きるということがあるのだと、神は踏み込んでお語りになります。

当時流布した言説は「バビロンの王に仕えることはない」(14)や「主の神殿の祭具は今すぐにもバビロンから戻って来る」(16)という威勢のよいものです。しかし、こうした威勢のよさは、そうでない現実に出遭った時、たちまち崩れ去ってしまいます。軛を負うことと生きることとが対立的に考えられているからです。

これは私たちの信仰にも当てはまる事柄です。“軛のない人生”を夢想すると、軛の存在が失敗の証拠のように思われたり、あるいは神が自分の人生に十分関わってくださらないかのように考えたりしてしまいます。しかし、神は軛を追いつつ歩む確かな道を備えてくださっています。

主よ、主イエスも言われました、「私の軛を負い、私に学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂に安らぎが得られる」(マタ 11:29)と。軛を負い生きるために恵みをください。

8月4日(月) エレミヤ書 第28章

平和を預言する預言者は、その言葉が成就したときに、本当に主が遣わされた預言者であったと分かる。(9)

エレミヤの軛の預言の続きです。預言者ハナンヤは、「イスラエルの神、万軍の主はこう言われる。私はバビロンの王の軛を打ち砕く」(2)との威勢よく預言します。神の力強さを信じているかのような言葉です。皆さんがこれを聞いていたとして、どう受けとめるでしょうか。

しかし、ハナンヤの預言は「平和」(9)を預言しているようでも、それは偽りの「安心」(15)です。強大な国によって「戦争や災害や疫病」(8)が放置され、命が軽視される罪深さに言及しない預言です。神はこうした人間の罪深さがもたらす悲惨や危機の中を縫うように導かれ、「そして生きよ」(27:12,17)と言われます。神がどんなに命を慈しんでおられるか、そしてその命を軽んじることがどんなに大きな罪かが、預言の主要なテーマです。

ハナンヤはエレミヤの軛の木の横木を打ち砕きますが、人間にはなお「鉄の横木」(13)があります。命の軽視とその悲惨さという軛です。しかし、エレミヤは、神はその軛をすら砕き、救ってくださると預言します。この神の揺るぎなき救いを信じて、今すでに真の平和を語り祈ることは許されます。

主よ、命を軽んじ戦争へと傾く人間の悲惨さを知りつつも、なお命を慈しむあなたに平和を祈り続けていられますように。

8月5日(火) エレミヤ書 第29章

あなたがたのために立てた計画は、私がよく知っている…それはあなたがたに将来と希望を与える平和の計画…(11)

大国バビロンに捕らえられ、その歴然たる力の差から、今の状態が永遠であるようにしか思えなかったユダの人々に宛てられた、エレミヤの手紙です。エレミヤがかねてから滅びを語っていたからこそ、この滅亡の状況下でなお語るべき言葉を失わなかったのでしょう。偽りの預言者が語ったように、調子よく災いなど起こらないと言っていたとすれば、遭遇した災いはその言葉を吹き飛ばしたでしょう。滅びにあってもしの神の言葉はなお人々を捕らえて離さないのです。

その言葉は「家を建てて住み、果樹園を造って、その実を食べなさい。妻をめとって息子、娘をもうけ、息子には妻を迎え、娘は嫁がせて、息子、娘を産ませるように。そこで増えよ。滅ってはならない」(5,6)と語ります。バビロンにおいても神が救いの道を用意してくださっていることを示すのです。近所のぬかるんだ建築現場が、ある日見ると泥一つなく舗装され立派な家が完成していて、あまりの変わりように驚きました。ぬかるみの中で計画が動き続けていたからです。人の計画にまさって神の救いは今に縛られることなく、「計画」(11)として動き続けています。私たちが見失っても、「計画は、私がよく知っている」(11)と言われるのです。

主よ、すべてを救いへと結んでいてくださるあなたの計画を信じます。

8月6日(水) エレミヤ書 第30章

さあ、私があなたの傷を治し
打ち傷を癒やそう——主の仰せ。(17)

これまで滅びの預言をし続けていたエレミヤが、明かな回復の預言を語ります。滅びの果てになお響く回復です。あらゆる滅びに揺らがず、なお回復を語ること、神の言葉の神の言葉たるゆえんは、ここにあると言ってもよいでしょう。それが「しかし、彼はそこから救い出される」(7)という言葉で語り出されます。

捕囚の地でこのエレミヤの言葉を読んでいるシェマヤはそれを信じません(29:24-)。エレミヤが告げたのは、バビロンに住んでそこで生きよという御心です。ところがシェマヤはそうした御心を知らずに、「捕囚は長引く」(29:28)と聞き取ってしまいます。

確かに回復までの70年は、気の遠くなる長さです。「あなたの痛みは癒えず、あなたの傷は治らない」(12)と言われているように、痛みや傷が今において残るのは確かです。しかし、「さあ、私があなたの傷を治し／打ち傷を癒やそう——主の仰せ」(17)と言われる主がおられます。私たちに残される痛みと傷を、主が御心にとめておられるのです。すべての痛みや傷には、そのような主の癒やしが用意されているのです。

主よ、痛みも傷も、すべてを取り去ってくださる日が来ると信じます。その望みへと、私たちを強く結びつけてください。

8月7日(木) エレミヤ書 第31章

彼のことを語る度に、なおいっそう彼を思い出し／彼のために私のはらわたはもだえ／彼を憐れまずにはいられない——主の仰せ。(20)

主が備えてくださった安住の地へとイスラエルが帰るという、喜びを基調とした、エレミヤの預言です。それはすなわち、単に領土を回復するというようなことではなく、慰め深い神との関わりの回復であり、主のもとへ帰るということです。「彼らは泣きながら帰って来る。／私は彼らを慰めながら導き／水の流れに沿って行かせる。／まっすぐな道で、つまずくことはない。／私はイスラエルの父であり／エフライムこそ私の長子だからだ」(9)と語られるとおりです。この神との関わりの回復は「私は、私の律法を彼らの胸の中に授け、彼らの心へ書き記す。私は彼らの神となり、彼らは私の民となる」(33)とされています。神と民の心が通じ合うことと言ってもよいでしょう。

「私は背いた後で後悔し…」(19)とは、後悔の中でしか心は真実に動かないということです。人間は主を十字架にかけた後に、やっとその途方もない罪の一端に気がきます。とはいえ罪に鈍感な人間の拙い後悔でも、神は「彼のために私のはらわたはもだえ／彼を憐れまずにはいられない」(20)と受け入れてくださいます。後悔には居場所があるのです。そこでこそ、主に深く出会います。

主よ、後悔からの「私は立ち返りたいのです」(18)という思いを、受けとめてくださることを感謝いたします。

8月8日(金) エレミヤ書 第32章

私は彼らに恵みを与えることを喜びとし、真実のうちに、心を込め、思いを尽くして、彼らをこの地に植える。(41)

バビロンの軍隊がエルサレムを包囲する危急時、エレミヤは町の陥落という縁起の悪い預言で王ゼデキヤに逮捕されます。その大騒動の最中、エレミヤの拘留先にやってきた彼の叔父は、自分の畑を買い取ってほしいと言います。牢の看守たちを証人に丁寧な手続きをし、売買契約が交わされます。地境など吹き払う暴風でも、神の契約は確かだと知らせるためです。主は「この地では、家、畑、ぶどう園が再び買い取られることになる」(15)と言われます。神の救いは、新しい理想の地でも、空想の中でもなく、暴風吹きすさぶ都に展開されていると言われます。

エレミヤは自分でその託宣を告げておきながら、本当にそんな救いがやって来ると信じる事ができません(25)。神の全能を本気で信じられないのです(17,26)。

主は、不信仰なエレミヤに対して「心を込め、思いを尽くして、彼らをこの地に植える」(41)と言われます。「アナトトにある…畑」と神が言われるように、神の救いは地上の番地を失うことがないほど現実的なものです。世界のあまりの有り様に信仰が揺らぐ人間を、主が永遠の契約で抱えつつ、救いへと持ち運んでくださいます。神の全能を信じる信仰もまた神が与えてくださるものなのです。

主よ、この世界も私の肉体も、神の救いの手の中だと信じていることができますように。

8月9日(土) エレミヤ書 第33章

もしあなたがたが、昼と結んだ私の契約、夜と結んだ私の契約を破り、昼と夜が定められた時に来ないようにできるなら…(20)

「主の言葉が再び…臨んだ」(1)と言われます。「再び」はここだけではなく、彼の預言にあって何度か繰り返される言い方です。

この預言の、いわば《再び性》の理由は、一つには、人間は何度も言われなくては、それを聴き取ることができないからです。エレミヤですら、迫り来るバビロンの軍勢の前で、エルサレムの復興を信じる心が揺らいでいます。預言の《再び性》の二つ目の理由は、一つ目の理由とも重なりますが、神さまが語ることをおやめにならないということです。つまり、壮大な神の救いに視野を及ばせることができない人間に向けて、神は諦めずに語られるのです。《恵み深い再び》で、ようやく人に信仰が育ちます。

神の救いの粘り強さは、「契約」として語られます。その神の契約の確かさが「もしあなたがたが、昼と結んだ私の契約、夜と結んだ私の契約を破り、昼と夜が定められた時に来ないようにできるなら、僕ダビデと結んだ私の契約も破られる」(20,21)と語られます。そしてこの永遠の契約は、主イエス・キリストの復活として確かなものとなりました。神によって死が命につながることは、昼と夜が必ず巡ってくるほど確かなことなのです。

主よ、確かな契約を信じさせるため、何度でも語ってくださっていることを感謝いたします。信じて確かな救いを受け入れます。

8月10日(日) エレミヤ書 第34章

六年間、彼があなたのために働いたなら、彼を自由の身として、あなたのもとから去らせなければならぬ。(14)

ゼデキヤは捕囚前の最後の王です。ヨヤキン王がバビロンに捕らえ移されたあと、叔父だったゼデキヤが、バビロンの王によって立てられました。ところが、ゼデキヤは傀儡になることを拒みバビロンに反逆します。この反逆が風前の灯のエルサレムの火を本当に消すことになる、と止められますが聞き入れず、とうとう火は消えます。しかしそのゼデキヤに、神は憐れみによって、人々がその死を悼むという、平安な彼の死を約束されます。彼の抵抗には民族の誇りの死守と民には見えたのでしょう。

ユダの問題は根深いものです。彼らは、一旦自由に解放した奴隷を態度を変え再び連れ戻します。自由をわきまえない人々に対して、自由という言葉が繰り返され、重要性が知らされます。王が民族の誇りのために殉ずるよりも、他者の自由を保障することの方がよほど重要なのです。つまり、都は民族の誇りを守る抵抗運動によってではなく、弱者にも保障されるはずの自由を奪うことによって滅びると言っているのです。奴隷が存在した時代でも、「七年の終わりには…自由の身として…させなければならない」(14)と言われるほど、自由であることは人間にとって欠いてはならないものなのです。

主よ、誇りよりも、誰かの自由を重んじていることができますように。

8月11日(月) エレミヤ書 第35章

私が語ったのに彼らは聞かず、私が呼びかけたのに彼らが答えなかった(17)

レカブ人は、ユダヤ人とは異なります(歴上 2:55)が、イスラエルと友好的でした。レカブの子ヨナダブ(本章 8 節) は熱心な信仰者で北イスラエル王国の改革者イエフと共に、バアル礼拝からイスラエルを守りました(列下 10:15-27)。そのヨナダブの「ぶどう酒を飲まず、住む家を建てず、ぶどう園も、畑も、種も所有せず、天幕に住む」(本章 8-10)という言い伝えを保っていました。そしてバビロン軍の侵攻に際して、エルサレムに逃げ込んできていました(11)。

ヨナダブの言い伝えを守る敬虔は称賛に値しますが、神の民イスラエルには、さらに大切な日ごとに神の言葉を聞き取るという使命が与えられていました。古い先祖の言い伝えを守ればそれでよいのとは異なり、源泉が神の知恵にある神の言葉は、神のすべてを人間が知ることはできませんから、神の口から出る一つひとつの言葉を聞かねばなりません。預言者は、その言葉を伝える職分です。ところが、イスラエルは何度も預言者が伝える神の言葉を受け入れず、とうとう主イエス・キリストまで殺してしまいました。

この時代、今日という日に与えられる御言葉をいただくのは幸いです。生ける神御自身の御言葉もまた生きているからです。

聖霊よ、来てください。今日、生きたみ言葉を私に聞かせてください。

8月12日(火) エレミヤ書 第36章

同じような言葉をそこに数多く加えた。(32)

エレミヤの言葉を書記官バルクが書きとめたと言われます。エレミヤの預言はこうして成文化し、エレミヤ書として今の私たちにまで伝えられていると考えてよいでしょう。「私があなたに語った日から、すなわちヨシヤの時代から、今日に至るまで」(2)とは、記述された年代から算定するとエレミヤの預言者生涯の初めから 22 年間分の預言の言葉です。それがエルサレムでバルクによって人々に読み聞かせられます。これを書記官などの心ある高官たちは、王ヨヤキムに聞かせようと、エレミヤらの安全を確保した上で、記述を王に伝えます。ところが、王は読まれるたびにナイフで切り取り、暖炉の火で燃やしてしまいます。

しかし、エレミヤはバルクの筆記でもう一度書き記し、バルクも「同じような言葉を数多く加え」(32)しました。エレミヤの言葉が書記官バルクの心をも捕らえたのでしょうか。その意味では、伝えられたのは正確な言葉と言うよりも、燃える心の言葉と言えます。その言葉が王の心をも変えることを願ったのです。

神の言葉は人の言葉と響き合うことを待っています。今日新たな言葉として私たちに響かせ、私たちを御許に引き戻そうとなさるのです。

主よ、焼却できない言葉が与えられていることを感謝します。あなたの御心と響き合う私の心でありますように。

8月13日(水) エレミヤ書 第37章

「主から何か言葉があったか。」エレミヤは、「ありました」と答え、「あなたはバビロンの王の手に渡されます」と言った。(17)

コンヤは (=ヨヤキン、列下 24:8-17)はすでにバビロンに捕らえ移され、バビロン王ネブカドレツアルがゼデキヤをユダ王国の王に立てます。ゼデキヤは自分と国のための祈りをエレミヤに乞います。迫っていたバビロンの軍勢は、ユダの同盟国エジプトが加勢に来たのを知り、一旦撤退します。しかし、エレミヤの祈りが答えられた結果ではありません。情勢から抱く淡い期待とは裏腹の預言をエレミヤは続けます。エジプト軍が帰ってしまえば、今度はバビロンは本格的に攻撃を仕掛けてくると。

その悲観的な預言をしたエレミヤは、敵に投降すると勘違いされ捕らえられます。ゼデキヤは、エレミヤを獄から密かに連れ出し、何とか自分の願い通りの言葉を聞きだそうとしますが、エレミヤはそれに応じません。王はエレミヤの言葉がほしかったのでしょう。自分の願いと同じ言葉をエレミヤから聞くことで、不安を乗り越えようとしています。願望の実現で不安を乗り越えようとすることは、私たちにもあることです。でも、願望に固執すればするほど、厳しい現実の中で不安が極まってしまう、それが私たちの現実なのではないでしょうか。

主よ、どうか、祈願成就よりも、神の救いの御心が染み渡った言葉をこそ、抛り所としていることができるように。

8月14日(木) エレミヤ書 第38章

我々にこの命を造られた主は生きておられる。

(16)

バビロンによる占領下でのゼデキヤ王の苦悩が描かれています。戦いへの勝利を信じたいエルサレムの住民たちは、高官たちにその敗北と占領を言い続けるエレミヤを死刑にするように迫ります。無責任な民の意見に、厳しい事情を知る王の苦悩がにじみます。エレミヤが告げている悲惨な結果の預言には、無視できない真実があるのです。しかし、民意も無視できません。そこで王は高官たちに「あの男はお前たちに任せる。王であっても、お前たちの意に反しては何もできないのだから」(5) とエレミヤを投げ渡し、エレミヤは水が涸れた泥の水溜に放り込まれてしまいます。

絡み合って身動きが取れない手詰まりの状況を、一番客観的かつ的確に見ることができたのは、外国人のエベド・メレク（クシュ人＝エチオピア地方の人）の宦官でした。彼が王に進言し、エレミヤは救出されます。(7節以降)

王はエレミヤから真実を聞き出そうとします。王の誓う、「我々にこの命を造られた主は生きておられる」(18)は、彼の本心でしょう。しかし、王が投降すれば先に投降した人々(反ゼデキヤ派)になぶり者にされると恐れ、立ちすくみます(19)。絡み合う事情の中で、信仰をまっすぐに生き切ることができなかったのです。

主よ、怯えながらも、どうかひとすじの信仰に生きることが出来ますように。

8月15日(金) エレミヤ書 第39章

私は必ずあなたを助け出す。剣に倒れることはない。あなたの命はあなたの戦利品となる。あなたが私を信頼したからである。(18)

事態は、最後の一コマへと進展します。包囲されて約一年半、とうとう都の一角が破られ、ゼデキヤ王と戦士たちは逃げ出します。しかし、バビロン軍は追いついて、王朝の途絶のためにゼデキヤの子どもたちが目の前で殺され、王の目も潰され、バビロンに連行されます。目に焼き付く最後の光景がわが子らの処刑となった王の悲しみはいかばかりでしょう。

悲惨きわまりない歴史的一幕の中で、バビロン王ネブカドレツアルは、エレミヤの保護を命じます。預言者エレミヤは、敵方にも知られていたのです。自国への厳しい批判を通し、世界に通用する真理として認識されました。けれども、エレミヤの伝える 70 年後のバビロンの衰退をも、彼ら自身が冷静に受けとめたかどうかはわかりません。

15 節以降のクシュ人の宦官への預言は、「監視の庭に閉じ込められているとき」(15)なので、時間的には逆戻りで、エルサレム陥落以前の預言が想起されています。そうするとこの記述の軸は、時間ではなく言葉の真実性です。「あなたがたが私を信頼したからである――主の仰せ」(18)と言われるとおり、宦官が信頼した主の言葉こそ滅びも揺らぎもしません。神の言葉は、天地が過ぎゆくとも滅びません。

主よ、あなたの言葉は、世界を支配する言葉であると信頼していることができますように。

8月16日(土) エレミヤ書 第40章

親衛隊長は…言った。「あなたの神である主は、この場所にこの災いを下すと告げられ、その言葉どおりに実行された。」(2、3)

バビロンへの捕囚の中にいたエレミヤは、バビロン王の親衛隊ネブザルアダンによって解放されます。彼は、「あなたの神である主は、この場所にこの災いを下すと告げられ、その言葉どおりに実行された」(2,3)とエレミヤが告げる言葉の内に神の支配を見えています。それゆえに、エレミヤは解放され、望むところで生活することが許されます。

エレミヤは、ミツパ(エルサレム北方約12 kmに位置。諸説あり)にとどまる選択をします。そこは、バビロンが残留民を集め、ユダヤ人のゲダルヤに監督を委ねています。ゲダルヤは、バビロンに仕えることを人々に勧めます。これはエレミヤの託宣とも重なる順当な選択です。しかし、ゲダルヤを巡る事態は複雑に混迷していきます。本章後半では、ミツパに集結した将軍の一人イシュマエルが、ユダの敵方のアンモン王と密かに通じゲダルヤ監督の暗殺を計画します。殺害計画を知った将軍の一人ヨハナンがゲダルヤに報告し、主謀者イシュマエルを殺害するように進言しますが、ゲダルヤは信じません。こうして生き延びた暗殺者イシュマエルによって、次章以降多くの血が流されます。

主よ、国を超えてすべてに及ぶ神の言葉に頼ることが、もっとも解決にふさわしいことを、どうか信じ続けていることができますように。

8月17日(日) エレミヤ書 第41章

イシュマエルと一緒にいたすべての民は、カレアの子ヨハナンとすべての将軍を見て歓喜した。(13)

前章でのゲダルヤ監督暗殺計画は、事前の密告にもかかわらず対応が取られず実行されてしまいます。暗殺者たちは、民衆もろとも、派遣されていたバビロンの戦士までも殺します。暗殺事件を知らない近隣地方の 80 人の一行が神殿に祈りに来ます。「ひげをそり、衣服を裂き、身を傷つけた姿」(5)ですから国難を嘆いて祈るためでしょう。暗殺者イシュマエルは同情を装い、嘔泣きで「さあ、ゲダルヤのもとへ」と彼らをミツパに連れ込み、そのうちの 70 人を殺し、その生き残りから食糧などを奪い、生き残りユダの残留民を捕虜としてアンモン人の拠点へと連行します。バビロンの猛威の前で、アンモンを中心に結集し生き延びようという目論みでしょう。

それを知った将軍ヨハナンは、イシュマエルを追い、捕虜を奪還します。捕虜たちは救出者ヨハナンを見て歓喜しました(13)。しかし、この歓喜は一時的です。バビロンが立てた監督の暗殺は、バビロンへの反逆と見なされますから、その報復の恐れもあります。さらに、これから多くの苦難がやってきます。

本当の歓喜は、単なる局面の打開ではなく、主の救いを知ることだと言えるでしょう。

主よ、どうかうつろな一喜一憂に捕らえられず、主から来る喜びをこそ、まことの歓喜とすることが出来ますように。

8月18日(月) エレミヤ書 第42章

彼を恐れるな——主の仰せ。私があなたがたと共にいて、彼の手から救い、助け出すからである。私はあなたがたに憐れみを与える。(11,12)

ミツパの残留民たちは、エレミヤに今後どうすべきかを問い、「私たちは必ず…私たちに語られる言葉のとおり、すべて実行します。良くても悪くても、私たちがあなたを御もとに遣わす私たちの神である主の声に聞き従います」(5,6)と伝えます。エレミヤはそれを受けて、主に祈り、ユダの地ミツパにとどまるようにという託宣を告げます。けれども、残留民たちは前言を翻して受け入れません。彼らは自分たちの將軍の一人だったイシュマエルがバビロンの戦士まで殺してしまったことで、バビロンが自分たちを滅ぼすのではないかと恐れたからです。

彼らは「良くても悪くても」とは言うものの、初めから自分たちの考える“良い”が決まっていました。自分たちが「幸せになるため」(6)は決して悪いことはありませんが、神がお与えくださる幸せよりも自分の考えの方(バビロンから逃げること)が幸せに近いと思えたのです。破壊者を恐れながら留まることがどんなに困難だったかと思います。「彼を恐れるな——主の仰せ。私があなたがたと共にいて、彼の手から救い、助け出すからである。私はあなたがたに憐れみを与える」(11,12)という言葉聞き続けなければならなかったのです。

主よ、憐れんでください。手っ取り早く逃げ出したくなるのです。どうか日ごとに力強いあなたの言葉で支えてください。

8月19日(火) エレミヤ書 第43章

主の言葉がタフパンヘス(エジプトの町)でエレミヤに臨んだ。(8)

エレミヤが伝えるユダの地に留まれという神の託宣をユダの人々は「偽りだ」(2)と信じません。「ネリヤの子バルク(書記官でエレミヤの言葉を筆記)があなたを唆して、私たちと対立させ、私たちをカルデア人の手に渡して殺すか、あるいは捕囚としてバビロンへ行かせようとしているのだ」(3)と言います。こうした誤解で、バルクがどんなに心傷ついたことでしょう。エレミヤに楯突いたのは「傲慢な人々」(2)とされています。いろいろと屁理屈を言いますが、初めから自分の思い通りの言葉を求めるばかりで、神の言葉に触れつつもその思いを変えることがなかったのです。信仰は、様々な問題や困難や疑いがある中で、今ここで神の言葉に聴く、聞き従う、という確信を持つことであると改めて思われます。真実な聞き方とは、自分の言葉を黙らせて神の言葉を聞くということです。

ユダの残留民は、バビロン王から逃げてエジプトに向かいます。エレミヤもバルクも同行し、なおも預言を続けます。エジプトの見事な建造物の下に石を隠し、エジプトの土台が崩れ、バビロンの土台が据えられる時が来ると預言します。そしてさらに言えば、そのバビロンも滅びるわけで、真実の意味で逃げられないのは、すべてを導く神の言葉だとわかります。

主よ、今日、どこまでも私を追いかけてくる、慈しみの神の言葉に耳を開きます。

8月20日(水) エレミヤ書 第44章

エジプトの地に住むユダのすべての人よ、主の言葉を聞け。(26)

エジプトの地に逃げていったユダの人々は、異なる神への信仰に対するエレミヤの糾弾にもかかわらず、頑なにエジプトの「天の女王」(17)に香を焚きます。イスラエルに啓示された神は、世界において唯一のまことの神で、イスラエルだけの神もエジプトだけの神もないはずです。

一方、別の形で世界で広く信じられる一つの教義があります。「パンに満ち足り、幸せで、災いを見ることはありません」(17)という教義です。ユダの人々は、その宗教を「ユダの各地の町やエルサレムの巷でそうしてきました」(17)と言い、エジプトでも同じ信仰だと言います。その信仰内容は、自分が考えたとおりの幸せを手に行っていることです。自分の幸せが神、ひいては自分が神となっています。さらに言えば、主イエスに石をパンへと変えさせようとしたサタンが背後にいます(マタ 4:3)。偶像礼拝をやめたら不幸せになった(18)という反論は、かつてのヨシヤ王の宗教改革での禁止のことでしょう。あの時に問題とされた、身勝手な幸せ像の浅薄さや罪深さには気付かないままです。「エジプトの地に住むユダのすべての人よ、主の言葉を聞け」(26)。回復の道はただ一つ、神の言葉に従って神を拝むことです。

主よ、自分の縮み上がった願いから、あなたの豊かな御心へと、御言葉によって私を連れ戻してください。

8月21日(木) エレミヤ書 第45章

しかし、あなたがどこへ行っても、あなたの命を戦利品としてあなたに与える。(5)

エレミヤと共に歩み、その預言の言葉を記した書記官バルクへの言葉の短い章です。かつてバルクが「ああ、災いだ。主は、私の痛みに悲しみを加えられた。私は嘆きで疲れ果て、安らぎを得ない」(3)と嘆いた嘆きを、主はちゃんと覚えてくださっていました。エレミヤはエジプトで死んだと考えられますから、彼の言葉がバルクに託されたのでしょう。エレミヤが自分の託宣の重みに耐えかねたように、その言葉を抱えるバルクも今また途方に暮れるのです。

主がバルクに「あなたは大きなことを求めている。求めてはいけない。私はすべての肉なるものに災いを下そうとしているからだ」(5)と言われます。詩編の「主よ、私の心は驕っていません。私の目は高ぶっていません。私の及ばない大いなること/奇しき業に関わることはしません」(131:1)と共に響きます。神がなさる「大いなること」は、神にゆだねる以外にはないと言うのです。そう信じた詩人は乳離れした子のように魂は静かだと言います。見るに堪えない現状にうなだれるバルクを、平安に導こうと慰めておられるのです。神はその責任において「大きなこと」を進めなさいます。それを見て書き留めるバルクの命を、神は保証されます。

主よ、次の場面を見るに耐えないと思う苦しみがあります。その中でもやってくる命の守りを信じる力をください。

8月22日(金) エレミヤ書 第46章

あなたは恐れるな、わが僕ヤコブよ

——主の仰せ。

私があなたと共にいるからだ。(28)

エレミヤ書は、本章からの諸国民への一連の預言で閉じられます。はじめにエジプトについて書かれます。「バビロンの王ネブカドレツァルは、ユダの王、ヨシヤの子ヨヤキムの治世第四年にこれを討ち破った」(2)とされているのは、紀元前 605 年のカルケミシュの戦いのことで、前章の残留民がエジプトに逃げ込んだ時代よりも、40 年ほど前の出来事です。ずいぶん前のことを語る託宣が、ここで取り上げられているのは、エジプトの行く末は以前から神のご計画のもとに見抜かれていたと示すためです。カルケミシュの戦いとは、バビロンの町カルケミシュで、エジプトのファラオ・ネコをネブカドレツァルが迎え撃つ形になり、そこでバビロン王が勝利を収める戦いですが、大国エジプトの敗北は偶然ではないと伝えるのです。「勇士らは打ち碎かれ、逃げに逃げて／振り向きもしない」(5)という姿は、バビロンが優勢になる成り行きを象徴します。そのような歴史的経緯の中で、ユダの残留民は滅び行くエジプトに逃げ込んだことになるわけです。その上で、「あなたは恐れるな、わが僕ヤコブよ——主の仰せ。私があなたと共にいるからだ」(28)と憐れみ深く呼びかけられます。

主よ、あなたの救いの民に、私も加えられていることを感謝いたします。時代は神の救いへと流れることを信じていられますように。

8月23日(土) エレミヤ書 第47章

ああ、主の剣よ…どうして、お前は静かになれるだろうか。／主が命じて、アシュケロンと海辺の地に／お前を向けられたからには。(6,7)

バビロンによる侵攻は、ユダのみならずパレスチナ一帯の人々にとっての破壊となります。本章は、ペリシテ人がその脅威にさらされることについての預言です。エジプトとバビロンという二つの大国の抗争にあって、パレスチナの南限ガザはエジプトの北の国境地帯に接し、緩衝地帯となっていました。両国の緊張が高まるとそこは戦場となり、近隣のペリシテ人たちもそれに巻き込まれたのです。

エレミヤはその悲惨な様子を「主の剣」(6)と語ります。イスラエルとペリシテの間には、長く続く敵対関係がありましたが、エレミヤはここで歴史の出来事に安直なストーリーを当てはめて、「ざまあみろ」と仇敵の崩壊を喜ぶようなことはしていません。もちろん、ユダの人々も同じ苦痛を経験するので、そんな見方をする余裕もなくなるとも言えるかも知れませんが。エレミヤはバビロンによってもたらされる悲劇をも巻き込みつつ、国境も民族も越えて世界を導く神の御手を見ていました。そうした視点の中で、敵味方にかかわらず、人々の叫びや悲嘆を、悲しみそのものとして見ています。

主よ、あなたのご計画を、私の安っぽいストーリーに取り換えてしまうことがないようにお守りください。すべての悲しみへの癒やしをつくろうとなさっているあなたの御心にこそ、心を開いていることができますように。

8月24日(日) エレミヤ書 第48章

しかし、終わりの日に

私はモアブの繁栄を回復する —— 主の仰せ。
(47)

モアブについての長い預言です。モアブは、イスラエルの東南部に位置し、荒野の旅の時代以来イスラエルに様々な影響を与えてきました。ダビデの曾祖母ルツはモアブ人で、その信仰のゆえに神とイスラエルに受け入れられました。一方、人身供犠を伴う彼らのケモシュ神礼拝(7,13,46)はイスラエルにも入り込み、主への信仰を躓かせました。本章でも、モアブに対してのイスラエルの感情は錯綜しています。

「モアブはケモシュによって恥をかく」(13)と言われます。また「私はその傲慢を知っている——主の仰せ。／その自慢話に根拠はなく／なすことも不正だ」(30)と言われます。それと同時に「私の心はモアブのために笛のように嘆く…モアブのどの屋根の上にも、どの広場にも嘆きの声がある。誰にも望まれない器のように、モアブが私に砕かれたからだ——主の仰せ」(36-38)と滅びゆくモアブに対しての神の嘆きが聞こえます。その罪のゆえにユダもモアブも神に裁かれますが、しかしその神は人間を惜しみ慈しむ神です。「しかし、終わりの日に／私はモアブを回復する」(48)と言われます。一番終わりに備えられるのは、主の救いなのです。

主よ、揺るぎない慈しみのしるしの、主の十字架をこそ、あなたの本心として見ているために、どうか御霊を注いでください。

8月25日(月) エレミヤ書 第49章

しかし、終わりの日に

私はエラムの繁栄を回復する —— 主の仰せ。

(39)

アンモン(1-6)、エドム(7-22)、ダマスコ(23-27)、ケダルとハツオルの諸国(28-33)、エラム(34-39)に対する預言です。アンモンについての裁きには、モアブのときのように同情は見られません。これは、「背信の娘よ／なぜ、谷を、水の流れるあなたの谷を誇るのか。／あなたは自分の宝に頼り／『誰が私に攻めて来よう』と言っている」(4)と、自らの強さを誇るところに理由があります。強さが誇りのアンモンは、さらに強いバビロンによって、誇りのすべてを失います。ある人が、こうした状態を「誇りが砕かれた時に自分たちのアイデンティティを再確立できないほど無力化されてしまった」と表現します。しかし、それでも「この後、私はアンモン人の繁栄を回復する」(6)と語られ、神の恵みが限りないことが示されています。預言の視点は広げられ、略奪行為で恐れられた遊牧民ケダルの滅び、さらには遠く離れたベルシャ湾沿いのエラムにまで言及されます。この預言はゼデキヤの時代のものだと言われますが、その時代に始まったバビロンの暴風がどこにまで及ぶかが語られ、そのバビロンの滅びも次章で語られ、預言はバビロンすら巻き込み、すべてを導く神を語ります。

主よ、悲惨な歴史に揺らぐ私たちです。どうか、すべてを通してを神は繁栄を回復してくださることを信じさせてください。

8月26日(火) エレミヤ書 第50章

今、私はバビロンの王とその地を罰する。そして、イスラエルを元の牧場に帰らせる。(18,19)

バビロンに対しての裁きの言葉です。イスラエルの回復がはっきりと語られます。歴史を見れば亡国の憂き目を見る民は、何もイスラエルばかりではありません。エレミヤの預言がもし自国の滅亡だけを語るだけならば、よくある栄枯盛衰にすぎません。預言が預言であり得るのは、それが他にはない固有の事柄として、前もって回復が語られることです。その意味では、イスラエルの滅亡に勝って回復の預言こそが、一連の出来事が神によるものだったということのしるしです。そのとおりに、他の民がバビロンの暴風の中で消失する中で、不思議にもイスラエルは回復されます。それは「私は…イスラエルを元の牧場に帰らせる」(18,19)と言われるように、彼らの力ではなく神の業です。「イスラエルの過ちを探しても、もうない。…ユダの罪も見いだされない。私が生き残らせた人々を赦すから」(20)という恵みで支えつつ、帰らせなさるのです。

バビロンのしるしは傲慢さ(29-32)です。その傲慢さは世界の歴史をかき回す力を持っていることも確かですが、それが力を持つのはほんの一瞬です。周囲に大きな悲しみを生む人の傲慢さをも巻き取るようにして、神はご自身の救いの計画を進めなさいます。

主よ、見えている崩壊を通して創造を進めなさるあなたを信じます。

8月27日(水) エレミヤ書 第51章

剣から逃れた人々よ、行け、立ち止まるな。

遠くから主を思い起こし

エルサレムを心に思い浮かべよ。(50)

本章がエレミヤが語る本書での最後の言葉です(64)。第1章で「私は、私の言葉を実現するために見張っている」(1:12)と言われていましたが、ここに来て改めて「イスラエルとユダは／その神、万軍の主に見捨てられてはいない」(5)と言われます。しかも、「彼らの地がイスラエルの聖なる方に背いて／罪に満ちてはいても」(5)と言われ、人の罪深さや望みなさに抵抗するように、見捨てずに恵みを施し続ける神が語られています。

その神が民に「遠くから主を思い起こし／エルサレムを心に思い浮かべよ」(50)と言われます。神は、単にご自分の栄光を回復なさればそれでよかったのではありません。それよりも神が重んじ給うのは、民の心が支えられることで、捕囚の地から都を想起させられます。民の心を支えようとなさる神の御姿をここに見ます。この言葉のとおり、神の民は離散した各地でシナゴグ(会堂)に集い、神の言葉を読み祈り続けました。民は神殿を失いましたが、しかし信仰を失うことはありませんでした。主御自身が《主を思い起こすこと》を祝福してくださったからです。そして、教会の思い起こしもまた、神が祝福してくださいます。

主よ、神殿を持たない私たちが、それでもあなたを思い起こすことを豊かに祝福してくださいますことを感謝いたします。

8月28日(木) エレミヤ書 第52章

彼には、日々の糧として一定の割り当てが、彼が死ぬ日まで、その生涯を通して常にバビロンの王から支給された。(34)

エレミヤ書の最終章は、書記官バルクによるものと考えられています。歴史的な経緯を示すことによって、エレミヤの語った言葉が歴史の中でどのように実現したかを知ることができます。列王記下 24:18 から 25 章 30 節までに記されるエルサレムの最後についての記述と重なっています。ゼデキヤのその後については、「彼が死ぬ日まで牢獄に閉じ込めておいた」と列王記よりもやや詳しい記述となっています。

最後に語られるのは、捕囚後 37 年を経たヨヤキン王の恩赦についてです。ヨヤキンについては、捕囚時の年齢が、8 歳(代下 36:9)と 18 歳(王下 24:8)の二通りの記述を見出しますので、恩赦の時は 45 歳か 55 歳かです。この書の終わりにこのように書くことによって、バビロン捕囚という厳しい歴史にありつつも、神がその地で生きた人々を守り続けてくださっていたことを、歴史の現実として記しています。

私たちは、現実の複雑さを嫌い、白紙に原色でわかりやすい救いを描きたくになります。けれども、神は様々なことが絡み合っている現実の時間の中で、私たちの思い通りではなくとも、確かにたゆみなく働き続け、すべてのことを結び合わせ、救いを進めなさるのです。

主よ、今日という複雑な現実の一日が、あなたが働き給う日であることを信じます。

8月29日(金) 哀歌 第1章

御覧ください、主よ。

私は本当に苦しいのです。(20)

哀歌は、ユダ王国がバビロンに滅ぼされる中で歌われている悲しみの歌です。1-4 章まではいろは歌で、この技巧によって“はじめから終わりまで”という、物事の徹底性を表します。同時に暗誦するためでもあります。そのようにして、悲しみを悲しみとして忘れずにいるのです。

第 1 章は、「ああ、民に溢れていた都が／寂しく座っているとは。／国々の間で偉大であった者が／やもめのようにになるとは。／諸州の女王が苦役に服すとは」(1)と始まり、エルサレムの荒廃を歌っています。そして、こうした荒廃が歴史の偶然ではなく、神への彼らの不従順がその理由だと歌います。「エルサレムは罪に罪を重ね／汚れた者となった」(8)、「私の背きの罪が束ねられて軛となった。／御手で編まれて、私の首に掛けられた」(14)などと言われます。

こうした悲劇の中で「主は正しい。私は主の口に逆らった」(18)と言います。それゆえに歌は「御覧ください、主よ。／私は本当に苦しいのです。／私のはらわたは痛み／心は私の内で動転しています。／私が逆らい続けたからです」(20)と主への祈りとなります。そうして、悲しみの中で神の慰めに出会うのです。

主よ、悲しみは必ずあなたの慰めに至ることを、どうか信じる信仰を与えてください。

8月30日(土) 哀歌 第2章

あなたの破滅は海のように大きい。
誰があなたを癒やせるだろう。(13)

第2章は、エルサレムの破滅は主の怒りによることが歌われています。「あなたの破滅は海のように大きい。誰があなたを癒やせるだろう」(13)と言われます。自分は自分で生きているように思うかも知れませんが、本当は無数の神の恵みによってはじめて存在しています。恵みをもって向き合い支え給う神が、それを閉ざされれば私たちは一瞬たりとも存在することができません。「海のように大きい」破滅を知ったユダヤ人たちは、改めてただ神の恵みによって保たれていたことを知るのです。

「主は計画を実現し、仰せを果たされた。はるか昔に命じておかれたとおり／容赦なく破壊された」(17)は、創造の秩序に逆らえば破壊に至るという世の定めを言います。人は、神の言葉の内に他者を大切にするように造られました。それゆえに、愛にもとるあり方は、必ず破滅につながります。子どもを犠牲に捧げる人身供犠が破滅の原因だとエレミヤは告げましたが、実はそのあり方が「女たちが自分の産んだ子を、その育んだ子を／食べることなどあってよいのでしょうか」(20)という惨劇につながっていたのです。「空しい偽りの託宣」(14)によって神の言葉から逸れて、その惨劇に迷い込んでいるのです。

主よ、私たちを造り支える恵みの言葉を、日ごとに聞き続けます。

8月31日(日) 哀歌 第3章

天におられる神に向かって

両手と共に心を上げよう。(41)

哀歌の著者の悲しみが述べられます。五つの章の中心です。22 のアルファベットによるいろは歌ですが、ここではそれぞれが3節ずつの、66 節の長い章となります。哀歌の中心の柱です。長い章の中で、悲しみの中核にある主の慈しみと真実を信じる信仰が語られています。

特に 31-33 節は中心の位置にあり、著者の最も強い主張があると考えてもよいでしょう。その中で「人の子らを辱め、苦しめるのは／御心ではないのだから」(33)と言われます。神の慈しみと真実の確かさに気付いているのです。その時にこそ、自分たちの苦しみが神に原因するものではなくて、自分たちの罪にあることに気付き「私たちは自らの道を探し、調べて／主のもとへ帰ろう」(40)と歌われます。「天におられる神に向かって／両手と共に心を上げよう」(41)。自分ではどうにもならない罪深さに気付き、もう自分を見ないのです。そこでこそ、心は高く神に上がるのです。新聖歌 50 番の「心を高く上げよう(スルスム・コルダ)」はこの聖句によるもので、アウグスティヌスが度々語った言葉です。罪深い自分にも注がれる神の慈しみと真実に促されてこそ、心は神に向けて高く上がるのです。

主よ、あなたの本心が慈しみと真実であることを深く知り、心を高く上げることができますように。

2025年7月31日(vol.51)

著者 高橋 誠

発行 日本ホーリネス教団
八王子キリスト教会

193-0832 東京都八王子市散田町 5-14-3
